

ジャン・アルテュール・ランボー

村 島 実 恵 子

ジャン・アルテュール・ランボー Jean Arthun Rimbaud がフランス文学史上に突如として現われ、その詩才を惜しげもなく、なげうったのは1870—73年、ランボー16才より19才迄の僅か3年にすぎない。

1854年10月20日、フランス北西部、ベルギー国境に近いシャルルヴィルと云う町で彼は生れた。彼には4人の兄弟がいた。軍人であった父親と剛情で情味にかけた母のもとで育った彼は小学校・中学校とフランス式詰め込み主義の教育に対し、家庭にも学校にも愛着を感じなかった事は、幼年時代を追想した「7才の詩人たち」を読んでもみると、ランボーのあふれるばかりの情感、希望のない暗い幼年時代、大人に対する不信感、そのいらだち、自分自身の無力感、そこからぬけ出ようとするあがきが良く描きつくされている。

1870年8月ランボーはパリに出かけるが浮浪者として捕えられ、故郷シャルルヴィルに連れ戻された。ランボーが15才の時である。1871年、普仏戦争が終った世情不安定なパリに行き、青春の夢を打ち砕かれて再び故郷に帰って来たランボーは、始めて熱心に詩作に若い生命を燃やすようになり、従来の詩型の破壊と、新たな感覚のリズムの詩を創ることに没頭した。1871の秋には詩を目的として再びパリに赴いた。ランボーが最も熱心に読んだのはヴィクトール・ユーゴーやフランス詩壇の主流をなしていたパルナシアンパルナシアンの詩人達の詩人達の作品であった。

ランボーは詩人ヴァンヴィルに宛てた手紙の中で次のように書き送っている。「私は優れたパルナシアンを尊敬しています。詩人は全てパルナシアンであるべきだと思います。そして出来れば私の作品をパルナシアンの詩集に載せて頂ければ幸いです」ランボー少年の詩が掲載され、最初に彼の詩を認めたのが新しい詩の傾向を持つ象徴主義の詩人ポール・ヴェルレーヌであった。ヴェルレーヌのすゝめで少年ランボーはパリに出て来た。ユーゴーはヴェルレーヌの紹介でランボーと会い、彼の詩をほめ激励を与えている。ユーゴーも「酔いどれ船」の名調にランボーの詩才を認めたのであろう。

お互いの詩才を認め合ったヴェルレーヌとランボーはベルギーへの放浪の旅に出た。ランボー19才の年であった。1873年ヴェルレーヌの飲酒に明け暮れる生活に嫌気がさしていたランボーは、彼に訣別を告げるのであった。口論の末、絶望したヴェルレーヌは拳銃を発射してランボーの左手に傷を負わせた。この為、ヴェルレーヌは投獄され、ランボーは傷心してシャルルヴィルに再び帰った。少年ランボーの心を捕えて離さなかった詩作への誘ないも、その頂点を見極めつくしたかのように詩心が冷めていった。ランボー、20才の若さの時であった。不朽の名作「酔いどれ船」、幻想的な感覚で表現した「母音」等、強烈な詩想は従来の詩の定型を破り、彼の詩魂溢れ、複雑にしてかつ凝縮された宝石のような散文詩「イリュミナシオン」や「地獄の季節」として表現され素晴らしい光を放っている。詩集「イリュミナシオン」は1886年ヴェルレーヌの編集によって初めて世に紹介されたのであるが、この編集に先立ち、問い合せの手紙をアフリカにいるランボーに送っているが返辞を貰えぬま、発表された。「イリュミナシオン」は韻詩13編と散文詩33編とからなっている。

ベルギーから故郷のシャルルヴィルに帰ったランボーは書き上げた散文詩「地獄の季節」の一部分を暖炉の中に投げ込んで焼いて了った。これにより詩人ランボーとしての生涯はそれで別れをつけていった。「地獄の季

節」の前編とも見られる「イリュミナシオン」はランボーの生活体験の報告であり、その体験中に語られる詩人の焦燥、喜び、苦悩等をあますところなく表現している作品である。これはフランスで最初にして完全な姿となった散文詩の詩形を確立させたと云えるであろう。ランボーが「地獄の季節」を完成した1873年、その出版を企画したが途中でその気を失って、出版社に未払いのまゝ、彼が持っていた原稿を焼却して文学の世界を去ったのであった。「地獄の季節 “ Une saison en Enfer ”」はベルギーのブラッセルの出版社で印刷をしようとしていたが、代金が出版社に未払いであった為原稿を出版社は返してくれなかった。この為、後年本屋の倉庫から原稿が発見された為、初版本が完全に残ったと云われる。

1873年の秋にはランボーはパリにいたが、以前の文学仲間に出会って、文学や詩について語りかけられても、不気嫌に黙りこんで、自分の意見、論評を一切しなかった。その後、約1年間英国で英語の勉強をした。それから彼の本格的な放浪生活が始まった。当時の詩人、ルコント・ド・リルやテオフィル・ゴーチュエ・ランボーが影響をうけたシャルル・ボードレール達のようにランボーも東洋に対して非常な関心を抱いていた為、1876年ジャワ島に渡り、そこに2年間滞在して、フランスに1度帰国した後、アレクサンドリアに行き、アラビアの南端アデンに着いてフランス人の経営する商店で店員となり、貿易の為隊商を引きつけてアフリカの奥地に向った。ランボーは文学の世界に別れを告げて以来、20年近い漂泊をくり返した。彼は英・独・伊・西語にも秀でていたのであった。

アラビアのアデンからランボーが友人に宛てた手紙の一節で、アデンを次のように描いている「ここには枯れた木さえなく、草の葉1枚もない、一いけらの土も1滴の清水もない、アデンは死火山の噴火口で、底には海の砂が一杯詰まっている。見るもの触れるもの、只僅かばかりの植物を辛うじて生やしている熔岩と砂ばかりである。又この附近一帯は全くの不毛な砂漠である」（1886年9月28日、アデンにて）現在でもアデンはこの様

相と変りはない、1959年7月、フランスに行く途中、フランス船から数時間下船したこのアデンは、灼熱の太陽のきらつく熱さに目まいを感じ乍ら、熔岩の砂ぼこり舞う荒涼した町並みと小店に日本製の電気製品が並べられ、扇風機（日本製）の風は生暖かく、トランジスタラジオが異国の町で買物客を待ちわびている様が今でも私の脳裏深く刻み込まれているの思い出す。

文学に離別して以来、約20年に近い漂泊の生活をランボーは送った。ナポレオンの様な迅速さをもって諸外国の国語をマスターしつつ転々とした。イギリス・ドイツ・スペイン・イタリア・ジャワ・エジプト・アラビア等。ランボーは英国ではフランス語の教師をしていた。スペインではドン・カルロス党員であり、ジャワではオランダの志願兵、アフリカではコーヒー・香料・象牙・金商人とし 隊商の隊長として、探検家として活躍したのであった。（註）

ランボーの作品をボードレールの「悪の華」に較べてみると、「悪の華」を不朽にしたのはそれが包含する近代人の理智や情熱の多様性ではなく、ボードレールの純粹な叫び声であろう。ランボーのそれは芸術家の魂と云うよりはむしろ実行家の精神であったと云えよう。ランボーの詩を読んで感じる事は、彼の詩には聊かの感傷のあともみられないと云う事である。痛烈に歌いあげた詩であり、読者を黙殺した見事な詩は選ばれた人々の為でもなく、己れの為にも歌っていない。只詩から逃れる為に、湧き上ってくる歌をちぎっては放り出したのであろう。彼の詩歌は無垢の風に乗れ、無人の里に放たれたのである。ランボー程短かい年月の間に全ゆる詩歌の意匠を乱暴に圧縮した詩人はいないのでなかろうか。私達読者は彼と共に文学の芸術の極限をさまよって行くのである。

ランボーは文学の世界を出てアフリカに赴いた。当時のアフリカは猛獣や蛮族の襲来に脅やかされ、酷暑と斗い乍ら進まなければならなかった。ランボーは詩の時と同じく勇敢にこの新しい生活に挑戦して行った。ランボーをそれ程新しい生活に一生懸命にさせたのは、見知らぬ土地に対する

好奇心丈ではないであろう。彼自身の手で冒険をおかし乍ら、象牙の取引
きをしたり、好戦的なアフリカ人に銃を売りつけたりして巨万の富を手
に入れる為に彼の情熱がかきたてられたのではないだろうか。そして遂には
アフリカのハラルに自分の店を持つようになった事からでも分る。ヴェル
レーヌは生活から何も学ばず、彼の詩魂は初めから生活を飛翔していた。
そこに彼の永遠の歌があった。

ランボーは生活そのものに膠着し、追い追われるものは生活そのもので
あり、生活の数学的飛躍そのものであった。

ポール・クローデルがランボーの文体を評して「明晰な音の滲透した柔
軟なストラディヴァリスのようだ」と云っている。²（註）

ランボーを始めて詩壇に紹介したのはヴェルレーヌであるが、ランボー
の性格を確実にみてとったのはマラルメであろう。「途方もない通行人」
としてマラルメが一番熱烈に、又美しく語った詩人はランボーであって、
ボードレールやポーやヴェルレーヌでないからである。ランボーを主題と
する散文詩に両者の深く強い心情の交流が現われているように思われる。
それは詩作を若年期の束の間の創作と考えたランボーと詩作を人生の唯一
の目的と信じたマラルメとの違いであろうか。只自分の為のみに書いたマ
ラルメでさえ、選ばれた最小限度の読者を必要としたのであるが、ランボ
ーは文字通り誰の為にも書かなかったからである。と云うのはランボーに
は彼自身の意志によって発表された作品がないからである。作品とはヴェ
ルレーヌの云う「薄青い不安そうな眼をして下界に流された天使」が野原
や森や街道にばらまいた衣のきれぎれの様なものであり、人々がそれを拾
い集めて驚嘆した時には、アフリカにいて隊商の編成に余念がなかったの
である。何がランボーをそれ程馳り立てたのであろうか。恐らくランボー
自身も気付かなかったのではないかと思われる。

ランボーの詩はサンボリスト（象徴主義者）達の詩に非常に近いのであ
るが、根本の心構え、生き方は違うと云えよう。サンボリスムの詩の運動

は簡単に云えば「肉体は悲し、全ての書は読まれたり」と云うマラルメの有名な詩句があるように、哀愁の上に築かれた精緻な言葉の建造物だと云えるが、ランボーにはその様な詩の精神はうかがわれず、ボードレールの憂鬱も、ヴェルレーヌの抒情も、ラフォルグの倦怠も、又、マラルメの哲学も見ることが難しい。ランボーの詩は、太陽の光や、海の青さ、額にじむ汗、要するに潑刺とした生活人がつかんだ生々しい物質の感覚が溢れているように思われる。彼程短時日に詩の魂を現わし尽した詩人は少いように思う。ランボーが至ろうとする世界は認識そのものが揺れ動くような世界である為、私達を納得させるようには書かれていないのである。詩人ランボーへの共鳴、信頼に応じて、その秘密のヴェールを少しばかり、私達に明かすのである。一般に詩人はその思想を人に分け与えると云う方法をとるものであるが、思想の誕生そのものをランボーは私達にふき込むような気がする。

詩人マラルメがランボーを論じたのはランボーの死後であるが、マラルメ自身も又、アフリカの僻地にランボーの未発表の詩が埋もれているのではなかろうかと書いている。と云うのはランボーが友人宛の手紙の中で「私はこれでも規則的に仕事をしているのです。散文で幾つか書いているのです」と云う事からも想像出来る。

1891年、ランボーのハラルの店も軌道に乗って来た頃、10数年間の無理な生活から来た極度の疲労と、アフリカの風土が、彼の体を痛みつけて了っていたのである。ランボーはその病気をも克服しようとして無理を、おしたのが彼の病気に拍車をかけていった。山地のハラルからようやくアデンに着いた時は最悪の状態であった。アデンの病院で彼は次のように書いている。「私は骸骨と同じようになった。床ずれで背中中の皮はむけてしまい、1分間の安眠も出来ない」。

マルセイユに移されたランボーは、医師から右脚を切断しなければならぬと宣告された。膝に癌腫を患っていたからであった。急をきいて故郷

のシャルルヴィルから妹イザベルが駆けつけて来た。右足切断の手術も効なく妹イザベルに看取られて1891年11月10日37才の若さで永遠に旅立って行った。終生無神論者として過して来たランボーも死の直前に妹イザベルの願いをに入れてキリスト者へと回心している。神の恩寵を求める心境に達していたのか、肉体の苦しみの限度が彼の精神を無力にさせたのかは分らない。

第一次大戦後、ダダイスムと云う運動が起った時、ランボーの名は一時的に高くなった。ランボーの詩はわが国でも「酔いどれ船」等で早くから知られていた。私達は作者ランボーと酔いどれ船に同乗して「非常の河を降って行くのであるが、最初のストロオフが終るかと思うまに船の姿は消えてもう既に波間に呑み込まれている。叙事とか抒情と云う言葉ではなく、突如として起る海と云う物質への突入の様子であり、人間の認識心理は霧散して、海が眼を見開いて唸りをあげ、強く単調なリズムが鳴り、壮麗なもの繊細なもの、醜悪なものが全ゆる色感と量感とを織り交ぜながら動いて行く。海に見入り海を歌っているランボーの姿を思い描かせるのである。彼の分身は詩の陶酔に入らず、詩の傍に立ち、その影を詩中に投影するのである。ランボーは一つの詩を完成して、次の詩に移った詩人ではなく、彼にとって詩は、うつろい行く季節のようなものである。

ランボーは早くから詩人について異様な考えを抱いていた。それは1871年3月15日付の手紙に表わされている³(註)「詩人は千里眼でなければならぬ。詩人は全ゆる感覚の長い、限りない、合理的な乱用によって千里眼になるのである。言うに言われぬ苦しみの中で彼、詩人は信仰を人間業を超えた力を必要とするのであり、又、それ故に誰にもまして偉大な病者、罪人、呪われた人、或は最上の賢者にもなる、彼は未知のものに達するからである。」

この手紙が発見されたのはマラルメの死後であるが、矢張り彼の眼は確かであった。ランボーにとって、詩とは或る独立した階調ある心象の意識

的な構成ではなかったのであり、見たものを語る事であったのである。ランボーには、抒情詩に対して全然興味を向けなかったし、彼の全注意力は客観物と、これに触れる感覚の尖端にいつも注がれていたのである。「自分の見るものを理解することが出来なくなってもまさしく見たものは見たのだ」とランボーは友人宛の手紙で言っている。ランボーの詩作はその放浪生活と切り離すことは出来ない。ヴェルレーヌと行動を共にしたブラッセル・ロンドン等。彼が詩を書き始めたのは1870年の春、ランボーの放浪は長く続いたが詩作の方は「地獄の季節」を書きあげると共に終えている。その為ランボーの文学生活は3年余りしかない。「地獄の季節」は文学への訣別の辞でもあり、その後、彼の死迄約18年間、ランボーは文学の為には何も書いていない。彼の名がパリの詩壇で高まっていたが全く無関心であった。

詩人として青年時代を送り、作家としても偉業を成しとげたヴィクトール・ユーゴに比べてランボーの生き方は余りにも自然的、野生的であり自己に忠実で純粹でありすぎたのか。放浪と冒険心がランボーを数奇な生涯に導いて行ったのであろうか。

(註1) Jean-Marie Caret

(註2) P.Claudiel "Conseration"

(註3) Rimbaud "Correspondance"

参考文献

J.Riviere : Rimbaud

P.Claudiel : Conseration

Oeuvres de Arthur Rimbaud

Rimbaud : Poesies

Bateau Ivre,

Vertige

Une saison en Enfer

Correspondancee

Mallarme "Rimbaud"